会報 松門

No. 6
昭和 63.3.1

・松陰敬仰の気運醸成
・松陰精神の継承普及
・松陰教学の研究振興

○編集発行　財団法人松風会
〒753　山口市大手町2－18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

新春有感

松風会監事　岩本肇

新しい年を迎えて、誰もが未来に向けて明るい希望を持ちたいのであるが、正直なところこの正月は、なかなかそのような気分になれなかった。いま世界には、いろいろな意味での激動が各地に起こり、そうしてそれが四方八方から日本に向けて押しよせて来ているように思う。しかも、日本の社会は未だにそれに対応するには至っていない。

しかも、この重圧は、年一年と年毎にその厳しさが増してくることを、誰もがひしひしと感ずるのがこの頃である。

また、今年の年まわりは辰年である。昔から辰年は荒れる年といわれている。しかも今年は干支でいえば六十年目毎にめぐって来る戊辰の年に当たる。戊辰の年は変革の年という。

歴史をひもとけば、この前の戊辰の年は昭和三年である。この年は今上天皇の即位の大典が行われた年に当たり、昭和という時代の出発であったわけだ。また、この年には初めて普通選挙が行われ民権の伸長した年である。この年は徳川幕府が倒れて明治新政府が出来た年に当たるわけである。このように歴史をふり返れば、戊辰の年は波乱に富んだ変革の年といわれる所以が理解出来るのではないか。

今年は果たしてどのような年になるであろうか。

思うに、戦後の日本はこれまで一貫して経済の時代であった。経済力が日本の方向を決めてきたといってよい。そうして経済大国日本に成長し、世界一の金持ち国になったわけである。

いま外からは「日本は自分勝手な国」とみられ国内的には「他人はどうであれ自分さえよければよい」という風潮が広がり始めているように思う。自分が生れ育って来たなつかしい地域社会であるふる里への人間的な愛着も、日本人としての当然の誇りも失われてしまったのではないだろうか。

教育会企画の松陰座像
（京大附属図書館保存）

もなった。眼を外に転ずれば、北支の雄張作林の爆死事件が起こり、この事件がいわゆる昭和の十五年戦争勃発のきっかけとなったことは忘れられない。

更に、その前の戊辰の年は慶應四年改元されて明治元年である。

松陰先生の言葉に「群夷競い来る、国家の大事といえども深憂とするに足らず。深憂とすべきは人心の正しからざるなり」というのがある。

国家にとっての一番の心配ごとは、国民の道義心や国家への忠誠心の衰え、更には国民の各職域での本務感の退廃することであるという意味であろう。

現在、日本の産業は貿易摩擦による輸出産業の不振、国際公約である産業構造の転換等で大きく変ろうとしている。これらは高度成長期以来、がむしゃらに世界中を金もうけの対象とした日本への国際的反発が高まった結果ではないか。考えてみれば、戦後の四十年間日本の社会は、欲望の追求を正しいこととして、それを原動力として生きてきたわけである。

今や私どもは、これまでの生き方を反省して、国としても個人としても、新しい生き方を模索しなければならないと思う。

しかし、再び元にもどることは許されない。前に向って歩かなければならない。この困難な時勢に対処する国民的生き方を学ぶもの、それは松陰精神への回帰ではあるまいか。

狂人的でありながら狂人でない松陰

韓国・梨花女子大学教授
日本・筑波大学外国人教師
朴　俊熙

戦後言論が自由になったせいかは知らないが松陰の見方に多少の変化があらわれている。ある精神分析学者は「江戸の仇を長崎で討つ」の諺にたとえて松陰を評価している。ヨーロッパやアメリカ等から攻められるような感じはするが「長いものには巻かれよ」だから対抗するわけにはゆかずそのくやしさを払うために身近かな国々を攻めようとしたという話である。ヨーロッパやアメリカ等に対する劣等意識をアジアで優越意識に入れ変えようとしたという見方である。その意味においては不安感または劣等意識を潜在的にもつ者によくありがちな形の行動のとり方だということになる。つまる所狂人扱いに通ずる見方である。多分戦争が終わるまではとても言えない表現であったであろう。

狂人扱いとまではいかないにしてもその他の人々の中にも結構「狂人的」であったという人々が目につく。これは松陰をなかなか正常な人間として見ようとしないで何か風変わりの人であったと見る見方が強いことになる。これは言論が自由になったからあらわれて来たことで、終戦前にもそう考えていた人はあったが言えなかっただけだと想像する。ただ当時としては彼を称えることはいいが批判する政治的雰囲気は許されなかったであろう。

日本で松陰に興味をもつようになってから関係の本を読んだり日本の松陰研究家の方々と話をしていく中に筆者も確かに彼が風変わりの人であったことを感じた。松陰の比較的短い人生と、その間にのこした業績を見ればそう言える面が数多くある。日本の方々と話をしていく中で筆者も彼は狂人的ではあったと思うようになった。だからといって本当の狂人であったかというとそうではないととらえたい。筆者の見方からする限り、彼は「狂人的ではあるが狂人ではない」ととらえるのが正しいと思う。言いかえれば凡人ではなかったということである。あの若さであれだけの旅行をし、勉強をし、時局観をもち、世の中のなり行きを見透し、国家建設に意欲をもち、この頃の言葉でいえば国際化を図る努力を身をもって実行した。また結果的だと筆者はとらえているが日本人教育のために努力したということ等を考えてみると並の人間ではなかったと思う。その意味からだけでも彼は「狂人的で狂人でなく」「非凡なる凡人」でもあったといえる。

ただ誰が何といっても彼の人となりは儒教的雰囲気の家庭で固まり知識の源泉は水戸学を中心とする儒学が思想の基礎になったことを否定することは出来ない。人によっては彼自身が「神州」と「国体」の概念を創造的にうち出したと考える方もいるようだがそうではない。水戸学を日本の国学とからみあわせながら発展させて来た先輩から得た考えであったという意味で彼の創造物ではないというのが正しいと思う。

一方彼は着実で生真面目な学者でもない。これといった理論体系を整えたのでもないからである。戦後よく考えられているような革命家または政治家というとらえ方も似合わない面がある。彼が政治に携わったこともなければ直接革命または革命的なことをしたこともない。そうかといってよく強調される教育家としてとらえることもどこかしっくりしない所がある。それは彼が初めから教育者になろうとしたこともなく、教育学者風にふるまったこともない。また教育自体を体系的に勉強したこともない。ただ認められるのは下田事件以後監禁の身になりすることもないので同囚達に孟子の話等をしたのがたまたま彼等の好む所となり、共感を得ることが出来たので、本気になって自身の考えていることを伝える機会を得たのである。また一時軟禁状態で多少の生活の自由を得たので幼い時から見慣れていた松下村塾に何名かの若い同志と話を懸命に続けたのが教育の意味をもつようになり、考え方によってはそれだけの効果もあがったと見られたのに留まる。この効果論に対しても結構論議の余地があるようにもみえる。

教育者ということについては今の日本の若者が松陰に対してこれといった関心を殆どもっていないこともさることながら、松陰に関する教育を受けたと思われる中年以上の年齢層の人々でさえあまり肯定的な興味をもっていないし、研究もしていないことからも伺うことが出来る。ただ一部の人々が明治維新時の功臣が多く松下村塾生から出たことをもとに素晴らしい教育者であったというくらいのものに感じられるだけである。

そうだとしてもそのこと自体に対してさえ一部では批判論があるようにも見えるし、本当の弟子は早死をしたのに、あまり松陰にはそんなに関心をもたれなかった人が何名かいて仕事をしたといえばしたともいえるという雰囲気が今日の状況のように受け止められる面もある。

その意味においては教育者的であったということは確かに言えると思う。しかしスイスのペスタロッチと似た人のような形で考えるとすればそれは松陰の本質をありのままにとらえることにはならないとするのが筆者の考え方でありとらえ方である。これが筆者が結果的に教育者的

であるという点である。

もう少しペスタロッチと松陰の差を考えて見るとはっきりして来ると思う。先ずペスタロッチは西洋のスイスの中でもチューリッヒに近い所で生まれまた貧しく不遇な条件で育った。これに対して松陰は東洋の島国で山はあるが日本海という広い海に面している所で生まれ豊かではないが両親もいる安定した家庭で育った。第二にペスタロッチの生活環境と松陰の生活環境はその点風土的に差があった。差は別にも多いがとにかく差があるということはそれだけ人となりも違う可能性を背景にもっているということにもなる。第三にペスタロッチの宗教的背景はキリスト教で「愛」を基本に人間関係を考え、キリスト教自体がもともと原罪の観念から出発しているものでその罪から許されるためにも他に対していいことをしようとする傾向が強く求められたことは想像に難くない。それに対して松陰は基本的には来世よりは現実の生活を倫理的にそして「仁」を基本に生活することを目標とする儒教的雰囲気で育てられたので原罪意識が潜在的にあったとは思われない。ただ「仁」が核になっている人間観が基礎になっているためペスタロッチのような個人主義的であり平等意識的であったというよりは集団主義的であり階級意識的で上下関係をわきまえることに気をつかったと考えられる。

第四にそれでペスタロッチは自身のような貧しい状況にいる孤児を中心に集めて初めから教育にたずさわったのに対して松陰はそれよりは国家意識政治意識が強く統一国家体制づくりと国際国家づくりに関心を集めた。彼があれだけの旅行をした目的もまさに其処にあったといえる。紙面の関係上もう一つの要因だけをあげると、ペスタロッチは殆ど同時代に出た教育学者ヘルバルトの学問的・方法論的に教育を考えることに影響を受け、いわゆる調和主義ともいわれる新しい教育理論と方法をとり入れることにも懸命であった。これに対して松陰は教育理論はもちろん方法論的に考えながら教えるなどのことをしたのではなかった。あえていえば真剣に感銘を受けさせることには念を入れたと思う。

このように幾つかの要因だけをとらえて考えても両者の間には基本的に距離があるといわざるをえない。それでも教育をしたことには間違いがないことではないかと言われたらそれまで否定するつもりはない。ただ基本的にいって両者の性格にはあまりにも差があって、実は比較することさえおかしい気がするということである。

それでは松陰の正体は何であろうか。筆者がとらえる限り狂人的ではあるが国家発展のため統一国家体制をつくり、国際化を図ることによって国の基盤づくりをすべきだと考えた情熱の持主であったと思う。そして非常に純真かつ素朴ではあるが愛国的国家思想家であったととらえたい。

いうまでもなく彼がそのような思想の持主になった背景を考えるとそこには水戸学の影響が何よりも強かったと考えられる。幼い時から比較的しっかりした家庭教育を受け、孟子等の儒教的教養の上に武士としての教養をも重ねて積むことを通し、国を守ることの意味を自身なみに体得することとつながっていたとも考えられる。それで全国を旅行しながら状況を実体験するとともに日本の国際的地位を自身なみに理解する努力を続けた。北海道を除いては青森から九州の南へ至るすみずみを見て歩いた。当時の経済と旅行の条件から推測する時それは今の世界一周所か何周以上の困難を伴ったものであったと思う。このような体験的学習は自身の国内状況理解の徹底を図るための素晴らしい計画であり実践であったという意味で最も高く評価してよいものであると思う。下田事件以後読んだ読書の広さと深さも素晴らしいものであったと共に彼を理解する上で必須の要件だと思われる。

しかし彼の基本的な思想の基礎は水戸学の影響の下に下田事件までに一応固まっていたとするのが筆者の見方である。事件以後の読書と教育の過程はそれを合理化して国民を説得する、いうならば自身の立場に対する合理化作業であったととらえたい。

このような意味から彼はギリシャのソクラテスに似た所があるといってもよい。ソクラテスは悪法も法である以上従うべきだといってあの有名な弁明を残して毒を飲みこの世を去って行った。ソクラテスが東西を問わず今なお「汝自身を知れ」とともに思考の原点ともいうべきものをなしているのはまさにその点にあると思う。この点松陰も自身が犯した違法行為に対しては一応すなおに罰を受ける覚悟をし、李卓吾の考え方等をとり入れながらも死んでいかざるを得なかった。

しかし彼も自身の立場をはっきり明らかにしておきたい気持ちで一杯であったであろうということは想像に難くない。筆者はソクラテス以上に強烈にその希望があったであろうと思う。色々の形で出来るだけのことはしておきたかったであろうとも考えられる。下田事件以後の彼の話しておいた内容、教育したもの、そして書簡等殆どすべてを筆者はソクラテスの弁明に当るものであると考える。たとえ自身は弁明する気持ちではなかったにしても何らかの形で自身の意志を通したいことを希望したことには違いがないとする時そう考えても失礼ではないと信ずる。やはり松陰もソクラテスと同じく神ではなく何の変わりもない人間であった。

松陰の足跡をたずねて⑥

―五条・八木・信濃―

厚狭教育事務所
木島俊太郎

穂高神社・わさび畑

「病弱であった禄山自身が自己の生命について深刻に考え松陰に共感を覚えたのであろう」などと禄山の心中を偲びつつ穂高神社を経て大王農場に向かう。

犀川を背にした複数扇状地であり、何処を掘っても十三度の自然湧水が見られ、わさび栽培に最適の地である。明治中期までは梨の産地であったそうであるが、状況判断の適確さとしぶとさが実り、わさび発祥の地静岡と並ぶ穂高わさびを作り上げた。信州人の気骨を現すものの一つである。

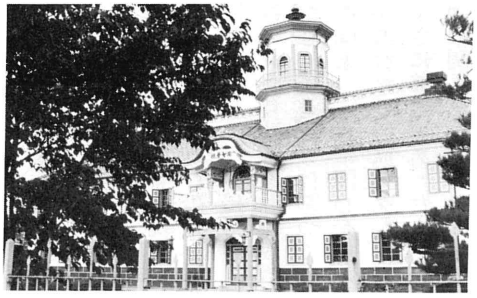
開智学校

開智学校の祖をたどれば、寛政五年（一七九三）藩主戸田光行によって開設された松本藩の学問所・崇教館に至る。

常に教育の先端を行き、中央に負けまいとする気概が感じとられる。子守教育など早くから幼児教育に目をとめ、明治二十年附属幼稚園を設立している点には驚いた。

また、館内に、教育に関する資料が系統的にかつ総合的に整理され、展示されている点学びたいところである。

更に、この開智学校が今なお長野教育の象徴として君臨していることに歴史の重みを感じる。



旧開智学校

松本城を見遣り、松本を後にする。千曲川を見下ろしながら松代に至る。松代町内探訪。

日本電信発祥遺跡

佐久間象山がオランダの書物を読み、松代藩の鐘楼とお使者屋とを電線で結んで、日本最初の電信実験をした場所である。

他にも、地震計、医療器・写真機など数多くの化学実験をしたという。象山の意欲の旺盛さには圧倒される。

聚遠楼跡

安政元年四月、松陰のアメリカ密航の失敗に連座し、象山も伝馬町の獄に投ぜられた後、八月松代へ帰藩し、御安町のこの地に蟄居を命ぜられた。以来、九年間この屋形のなかで過ごす。ここで省録を書く。現在建物は別の場所に移されている。

松陰が象山に入門したのは嘉永四年の夏であった。松陰は普段着のまま象山を訪れ弟子入りを懇請した。松陰の姿を見た象山は不機嫌に「お前は何を求めて来たのか。ただ知識を得るためか、それとも人の道を知るためか。私は単なる知識の切り売りはしない。道を学ぶならそれだけの礼儀を正して来い。」と追い返した。

自分の非礼を悟った松陰は、その後衣服を改めて象山を訪ねたところ、象山は快く松陰を座敷に迎え入れた。以来、二人の親交は深まる一方であった。

象山は松陰の踏海の意志を知り、その壮途を祝って送別の詩にせん別金四両を添えて送った。

吉田義卿を送る（送別の詩）

「之の子霊骨有り、久しく厭う
蹩躄の群。衣を奮う万里の道。
心事未だ人に語らず。即ち未だ
人に語らずと雖も、忖度するに、
或は因有らん。行を送りて郭門
を出ずれば、孤鶴秋旻に横たわ
る。環海何ぞ茫々たる。五州自
ら隣をなす。周流して形勢を究
むれば、一見は百聞を超ゆ。智
者は機に投ずるを貴ぶ。帰来須
く辰に及ぶべし。非常の功を立
てずんば、身後誰か能く賓せん。」

佐久間象山墓所「蓮乗寺」

この夜、「禄山日記」・象山の話しに時を過ごす。

十月三十日（木）

千曲川を渡り、万葉の碑を眺め、赤魚・姥捨山・田毎の月などの話を聞き、信州は不思議なところで、洋風の建物が違和感を持たずに自然に溶け込んでいると思う。信州人のセンスの良さが生み出したのか、何もかも溶け込ませる勇壮な自然が醸し出すのか。豊かな自然が豊かな心を育てる。厳しい自然が気骨を育てる。自然の広大さ、山の雄大さが人の大きさを育む。

川中島古戦場

三太刀七太刀跡・執念の石・土塁跡等つわものどもの夢のあとを偲ぶ遺跡が多くあり、戦国争乱期の古戦場の面影を今に伝えようとしている。

目をつむれば、喚声や太刀音が聞こえてくるようである。

長野市立博物館

この博物館の構想は素晴しい。時間（歴史）と空間（立体感）と質（内容）の三つをうまく組み合わせた総合的博物館である。市単独で二十四億円をかけて建設し

たということである。そのスケールと度量にただただ敬意。

真田邸・宝物館・文武学校

真田邸は九代幸貫が母「ていの方」の隠居所として建てたものである。庭園のどうだんつつじは紅葉の盛りである。つつじといっても二メートルを越す古木である。

宝物館には真田一族にかかわる物が陳列されている。

各代藩主の書もまた目を楽しませてくれる。八代藩主幸貫は佐久間象山等逸材を登用し、諸芸にも達し、その書は格別目を引くものであった。書は人を顕す。名君は名臣を呼び、名臣は名君によって生かされるとか。正に然り。

象山聚遠楼跡

文武学校は時間がないので走るようにして見る。象山の意見にもとづいて、藩士の子弟の文武の道を奨励するため、藩校として設立したものである。すぐそばに松代小学校があるが、児童たちはこの精神をどのように受け継いでいることであろう。

象山記念館・象山神社

象山の書・画から始まり、意見書、愛読書に至るまで収集陳列されている。

あの時代に洋書を読んだことも驚きだが、それ以上に、これを解読し、電気にかかわる実験や器具作成に挑戦した彼の好奇心と研究心に感嘆する。

省㕝録に「余年二十以後、乃ち匹夫も一国に繋りあるを知る、三十以後乃ち天下に繋りあるを知る、四十以降乃ち五世界に繋りあるを知る」と書かれている。象山の器の大きさを伺い知る名文である。

松陰は自分の書いた幽囚録を象山の元へ送り閲を乞うほど彼に心酔していた。高杉晋作が「国の前途についての教えを請う」と松陰の密書を象山の元へ届けたのは、既に松陰が処刑された後であったという。

長野を発ち、高崎を経て上毛高原に向かう。日暮れて闇路をたどり法師温泉に着く。法師は、自然のふところに抱かれて安らかに眠れるまさに秘湯である。

最後の夜、話しに熱が帯びる。松陰もこのように幾夜も語り明かしたことであろう。これからの教育を、誰がどのように方向付けて行くのか。今こそその課題に真剣に迫るべき時でもある。

十一月一日（金）

午後二時東京発ひかり27号に乗り、午後七時四十二分無事小郡帰着。

高　義　亭

感想・反省

人生は旅であるという、旅もまた人生である。現地を自分の目で、身で確かめること、そして、そこで人が人や自然とどのようにかかわっているかを確かめるという貴重な体験をすることができました。

松陰の足跡を尋ねるということは、松陰がいかに生きたかということと同時に、他の人々とどのようにかかわり、自分の人生を構築して行ったかをたどりなおして見ることでもあります。

象山は獄中で「天の将に大任を是の人に降さんとするや、必ず先ず其の心志を苦しめ、其の筋骨を労し、その膚を餓えしむ」と吟じて、松陰を励ましたということです。

後に「鉄の将に剣ならんとするや、炉に入り、鞴を承け、碪に座し、鎚を受け、灰に塗れ、泥に汚れ、寒水に淬ぎ、越砥に斂む。其の鉄たるやまた苦し。然れども鉄にして、その艱苦を甘受せざれば、安ぞ其の器を成就して、君子の佩となるを得んや。惟うに人も亦然理。」と書き添えたということです。

松代藩の鐘楼

防長教育いや日本の教育の柱たらんとする松陰も、今回尋ねた森田節斎・谷三山・佐久間象山をはじめ数えきれぬ多くの人々とのかかわりの中で育ったような気がします。

私達も今回の経験を大切にし大いに奮起したいと考えています。

道中の三先生のお話、それぞれに味があり、含蓄のある一言一言に感銘を覚えました。村田先生とは毎夜語り明かしました。先生の読書量と日々の生活の構えに学ぶところが沢山あり、その熱血と行動力は接する者の心を動かします。よい出会いでした。

好機を与えていただいた松風会、道々御指導頂いた先生方、更に、各地でお世話になった方々に対し心から感謝の意を表します。

「松陰の道」吟行

山口県教育会　大田恭次

東北遊日記による「みちのく松陰道」が修復整備され、これがロマン・ウォークの道あるいはまた、青少年鍛練の道として活用されていることは松門第四号でも紹介されている。

昭和五十四・五年頃、松陰生誕百五十周年記念事業に旧萩往還を「松陰の道」として修復されるよう山口県教育会としても県に要望したことを思い起こすのであるが幸いにこれは「歴史の道」として立派に整備、活用されている。この萩―山口間の街道にとどまらず、東遊日記等による山口―防府―岩国間、更に廻浦紀略による北浦海岸、西遊日記による明木―絵堂―秋吉―四郎ケ原―小月―馬関に至る街道等松陰先生が跋渉された道筋を明らかにし、要所要所に由緒を解説する標識、詩碑等を建立し、これを青少年をはじめ一般県民に歩行鍛練または松風敬慕の道として活用していただくことはきわめて有意義なことと考える。

松風会・山口県教育会は前述の青森県の実践とも呼応し、新年度から県内「吉田松陰の道」の探索と修復を重点事業に掲げ、推進することを計画している。

紙上における松陰研究はもとよりのこと松陰先生の感懐をもってその道を踏破してみるならば先生の心魂が一層の実感となって伝わってくるにちがいないからである。

幸いに涙松の箇所には涙松の歌碑、夏木原には東送詩碑、上関には帰郷夢断の詩碑、関戸には奔流滔々の詩碑、小瀬川畔には夢路にもの歌碑、呼坂（熊毛町）にも寺島忠三郎と二人の歌碑が建立され、そこを過ぎる人に深い感銘を与えている。

その他県内跋渉の途次詠まれたものを拾ってみると癸丑遊歴日録によれば三田尻における恩裁舎舊、会稽有辱、華浦桑山、懐国思家の詩、西遊日記によれば赤馬関での長山幾畳の詩、吉田では早発戴星の詩、帰家にあたっては奮然擔笈、鶺鴒原遠の詩、長崎紀行によれば明木での少年有所志の詩、縛吾集によれば三田尻での菅公廟外の和歌三首及び連霖残熟、梅霖始霽の詩、廻浦紀略によれば赤馬関における君懐奇気、雄才足振、壁立危巌の詩等がある。

詩歌は心の叫びであり、真情を吐露するものである。その人格、人間が赤裸々に、率直に描き出されるものである。それだけに読む人の心を動かし「鬼神をも哭かしむる」威力を秘めている。

短かい生涯の中にもぼう大な著述、論叢を書き残し、測り知ることの出来ないほど深遠な思想、哲学、教訓の宝庫を遺産として残して下さった松陰先生の全貌を究めることは至難の業であるが、それを解きほぐす緒口は前述の意味あいから案外、その詩歌にあるのではなかろうか。

松陰詩歌についてきわめて詳細に、丹念にまた忠実に研究、分析した徳山大学山中鉄三教授の「吉田松陰の詩藻」（徳山大学研究叢書一）は貴重なよりどころである。終焉に至るまでの漢詩六七三編、短歌一〇九首、俳句六三句を見事に分類、解説している。著述、論叢のおびただしさに圧倒されるとともに詩歌創作の多数にのぼることにも驚嘆させられるところである。

著作、執筆あるいは思索、言動の一つ一つとこれらの詩歌がどう結び着いているのかをくわしく吟味してみる余裕がないが、それぞれの時所位に触発されて詩歌の形となって詠嘆されたものであろう。それゆえにその時点での最も高調された松陰魂が結晶したものであると見ることができよう。とすれば詩歌の中に最も赤裸々なそのままの松陰像をうかがうことができるといってしかるべきであろう。

この意味で松陰先生の人間に迫る手がかりはここにあると考えるとき、当時を再現することはできないまでもその所に立ちその感懐をもって詩歌にふれることは最も効果的な方法であるといえる。なお詩歌は声に出して詠み、吟ずることによって作者の心に迫ることができるものである。

吟詠は詩歌の心をうたい出しその心をわが心とする―共感する―ところにある。節回し、抑揚の巧拙は二の次である。それらはすべて詩歌の心をうたい出す手段である。したがって心を異にする詩歌には万葉集二千五百余首にその数だけの詠法があるように千差万別の吟じ方がある。

吉田松陰先生東送之碑（夏木原）

松陰詩歌八百四十余すべてについてその所位に応じて吟詠できないまでもせめて県内「吉田松陰の道」を明らかにし、箇所箇所における詩歌の由緒を正し、松陰先生の感懐に浸ってこれを吟詠してみることはその心魂に迫りながら自らを鼓舞高揚することになるにちがいない。

このようにして日本本土の北辺・青森と西端・山口の「吉田松陰の道」がやがてつながっていくことを夢見ながらまず県内「松陰の道」にまつわる松陰詩歌吟行を提唱する次第である。

松陰をめぐる人びと⑤

―佐久間象山―

石川　稔

佐久間象山は文化八年（一八一一）二月、信州松代藩で生まれた。幼名を啓之助、二十八歳の時藩の許可を得て修理と改名した。雅号象山は生地の裏山象山（ぞうざん）に因み、二十六歳のころから用いた。（以下象山と呼ぶ）

象山の父は佐久間一学という松代藩士で母は荒井氏の娘まんであったが、正妻でなかったため象山も正式の嫡子と認められなかった。しかし文政八年元服の年に嫡子と公認され藩主に拝謁を賜わっている。

父一学は文武両道に秀でた武士であったので藩主に重用され象山もまた父同様の愛顧を蒙った。このことはどこか松陰における藩主毛利敬親との関係を思わせる。

一学は孫のような象山（年齢差五十五歳）の養育に少なからず心を砕いた。象山は生来頭がよく記憶力抜群。四、五歳のころ父の好む易の六十四卦の名を全部暗誦したという。腕白も人一倍ひどく「妻女山から槍が降る。佐久間の家から石が飛ぶ」と言われたほどであった。しかし勉学修業には精励し、幼少時漢学剣術を父より、長ずるとともに会田流和算、馬術、水練を学び、元服後は本格的に経書詩文を学んだ。又活文禅師に師事して支那音、琴を学ぶ。父の死後江戸に遊学し佐藤一斎に入門、しかし一斎は陽明学を、象山は窮理実践の朱子学の立場をとっていたので学説が合わず、一斎の許しを得て詩文の指導のみを受けた。

松陰と象山の出会いは嘉永四年（一八五一）松陰の第一回江戸遊学にはじまる。この年五月松陰は江戸木挽町の象山塾を訪ねた。この時松陰はふだん着のまま象山に入門を懇請したので象山は至極不機嫌であった。「お前（やし）は何を求めてここに来た。ただの知識か、それとも人の道を知るためか。私は単なる知識の切り売りはしない。道を学ぶのならそれだけの礼儀を正して来い。」と言って追い返した。非礼を悟った松陰はその後七月二十日衣服を改めて正式に入門を請い許された。しかし入門当初から必ずしも象山に推服した様子はなく、佐久間塾は四八九の日が講義日であったが、しばらくの間さほどの熱心さは見られない。

松陰が急速に象山に傾斜していくのは嘉永六年（一八五三）藩から諸国遊学の許可を得て久々に江戸に出てからである。この年松陰と前後するように米水師提督ペリーが米艦四隻を率いて浦賀に来航し、松陰は国家の危急存亡をさとり、将急私言、急務條議等をもって事態の切迫を告げる。このころ松陰と象山とは互に心をひかれる者の如く呼吸は一つになっていた。度々会し時事を論じ対策を練った。

象山は幕府の勘定奉行川路聖謨に「宜しく俊才巧思の士数十名を撰んで蘭舶に付し海外に出し、それをして便宜事に従い以て艦を購はしむべし。則ち往返の間海勢を識り操舟に熟し、且つ萬国の情形を知ることを得てその益たる大ならん」と献策している。しかしこの策は幕府のとる所とならず、象山はジョン万次郎の例をひき松陰に漂流策を暗示した。松陰は大いに心を動かし直ちに長崎の露艦に向うが目的を達することができなかった。この時象山は松陰の志を壮として旅費と共に送別の詩を贈っている。この詩は後に松陰の下田踏海事件に関連して象山が罪を得る端緒となるものである。

象山は儒学者であり科学者であり、医者であり砲術家であった。正に万能の士であるが、象山の真の偉大さはその多才にはなく、国家の前途を憂える先見の明と愛国の至情に徹した実行力にあった。この博学万能の士も晩年は不遇であった。元治元年将軍家茂の命により上洛するが、その年の七月三条木屋町で遭難、五十四歳の生涯を閉じた。象山の正室は門弟勝海舟の妹順子であるが子がなく、嫡子は側室お菊の生んだ恪二郎である。象山が兇刃に倒れた時はまだ十七歳であった。

事務局通信

昭和六十二年度主要事業

・会報「松門」発行・配布
九月一日　第五号（六千部）
三月一日　第六号（六千部）

・松陰教学シリーズⅡ「吉田松陰の甦る道（上）」　三千部刊行　残部があるので希望者は事務局までご連絡ください。（一部五百円）

・吉田松陰研究講座の開設　県生涯教育センターと共催、県下十二町村で五月～十月にかけて開催　受講者約千名

・第三回松陰教学研究会の開催
十二月一～二日山泉荘、県小中高の校長三十名参加　講師上田孝治・平川喜敬・三輪稔夫・石川稔の各先生

・松陰先生の足跡をたずねる旅の実施　九月二十九日～十月二日鎌倉―出雲崎―米沢を歴訪、四名参加

・吉田松陰輪読会　八月四日山口県教育会と共催、会場教育会館　参加者約七十名

・研究団体への助成―七団体

・松陰研究者との資料・研究物の交換、ビデオ・図書・軸物等の受贈　感謝　（谷口）

資料展示室

吉田松陰先生関係図書

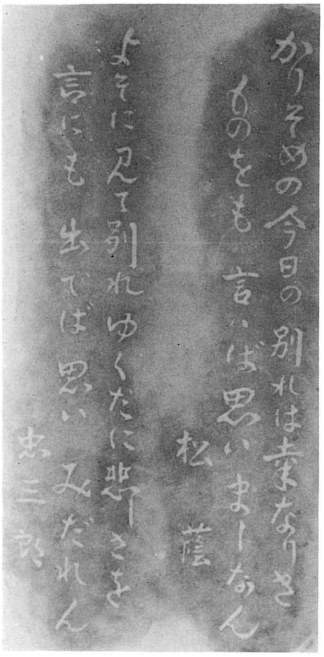
（つづき）

・吉田松陰年譜・吉田松陰伝―抜粋綴込
・史跡と美術（団子岩の松陰）
・日本及日本人　臨時増刊　吉田松陰号　明41
・実録維新十傑　第十巻　吉田松陰　高杉晋作　伊藤痴遊　平凡社　昭10
・吉田松陰先生と日本精神　玖村敏雄述　長府町尊攘堂事務所　昭10
・松陰先生と吉田稔麿　来栖守衛　山口県教育会　昭13
・宇都宮黙霖　吉田松陰往復書翰　川上喜蔵編著　錦上社　昭57
・吉田松陰の甦る道（上）　松風会　昭62

幕末維新郷土関係図書

（つづき）

・官暇漫吟　下　文政4
・防長の資料
・清末藩年表　堀哲三郎　下関郷土会
・文久三年七卿落　山口県統制本部
・藤公餘影　古谷久綱　民友社出版部　大2
・防長十五年史　馬屋原二郎撰博文館　大4
・伝家録　堀真五郎　大4
・防長の教育　荒川清澄　中村勉弥　大7
・維新実談　七卿芳跡　作間鴻東　大同印刷所　大14
・明治功臣録　前後編　朝比奈知泉　文武書院　大15
・増補防長人物誌　近藤清石編防長史談会　昭7
・婦女鑑　林譲　吉川弘文堂　昭10
・大楠公　昭10
・明治維新と女性　布村安弘立命館出版部　昭11
・防長史講話　田中真治　山口県教育会　昭11
・皇政復古七十年記念　山口史蹟概覧　作間久吉　山口市役所　昭11
・防長精神史序説　小川五郎防長文化研究会　昭12
・旧萩藩非常用貯蓄金穀　三輪為一　防長文化研究会　昭15
・防長郷土資料文献解題　第一・二集　山口県史編集所　山口響海館　昭15
・五雄藩皇国精神講義　船本恒一　吉敷郡国民学校教員会　昭17
・乃木大将日記　渡辺求　国民社　昭17
・防長殉難志士顕彰之記録　明治維新防長殉難者慰霊顕彰会　昭31
・防長人列伝　田村保二　誠文社　昭32
・毛利家乗全十八巻　長府毛利家　防長資料出版社　昭50
・久坂玄瑞全集　福本義亮編マツノ書店　昭53
・維新の先覚　月性の研究　三坂圭治監修　マツノ書店　昭54
・大田絵堂戦史　小泉喜代一山口県　昭55再版
・徳山大学創立十周年記念論文集　徳山大学経済学会　昭56
・杉民治先生伝（復刻版）　中村助四郎　マツノ書店　昭56



熊毛町呼坂の碑

・萩城太平記　長崎謙二郎　刀江書院　昭34
・乃木資料　椿惣一　長府博物館　昭38
・高杉晋作　古川薫　創元社　昭46
・徳山大学論叢　徳山大学　昭49
・高杉晋作全集　上下　堀哲三郎編　新人物住来社　昭49
・山鹿素行　山鹿光世　原書房　昭56
・萩の史談雑録　松本二郎　昭57
・松代文武学校　松代小学校編信濃教育会出版部　昭58
・真田家と佐久間象山　長野市観光協会
・防長文学碑採拓行　西村勇　独楽庵　昭59
・杏花爛漫上下　井出孫六　朝日新聞社　昭59
・萩藩給録帳　樹下明紀　田村哲夫　マツノ書店　昭59
・毛利元就卿伝　渡辺世祐監修マツノ書店　昭59復刻
・つくまのなべ　荻原守衛の日記　所四出男編　信濃教育会出版部　昭59
・吉川元信　瀬川秀雄　マツノ書店　昭60復刻

（編集後記）

●朴教授は松陰をソクラテスと共に哲人と見る、韓国で数少い松陰研究家。この春在籍の韓国梨花女子大に復帰。この玉稿に松陰の歌「世の人はよしあし事もいわばいへ、賤が誠は神ぞ知るらん」の掲載希望があったが余白がとれず割愛。乞ご寛恕。

●「足跡をたずねて」と「めぐる人びと」の内容に若干の重複があるが、象山の人柄の強調と読んでほしい。

●大田先生の「松陰の道吟行」はすばらしい発想、今後に大きな夢と課題を孕む。更に多くの方々の知恵を求む。

●巻頭岩本先生の「新春有感」耳を塞いで先賢の声を聞き、眼を瞑って未来の光を見てほしい。

（石　川）